’和僑’新時代、メコンに生きる！

～日中10月例会レポート～

「視野を広く！中国、そしてアセアンを知る」という本年度のスローガンのもと、ベトナム・ホーチミン在住の公認会計士・樋崎康彰さんに発展成長著しいベトナムについて講演していただきました。（2014年10月14日 大江ビルにて開催）

報告者　樋崎 氏 ▶

樋崎さんは1977年シンガポール生まれ（現在37歳）。2001年に東京大学大学院（原子力工学専攻）を卒業し、IT企業勤務時代に公認会計士試験合格。その後、日本およびアジア各地に拠点を持つ経営コンサルタント企業「株式会社エスネットワーク」に転職。東京、大阪を中心に様々な企業への経営コンサルを経験します。そして3年前から同社のベトナム・ホーチミン事務所に。当初、日本人3人からスタートした同事務所は現在ではベトナム最大規模を誇る日系会計事務所に成長（スタッフ130名のうち半数は有資格者）。日系企業のベトナム進出支援、および進出後の会計、労務、M＆Aコンサルなどを行っています。

▲ 例会風景

□ ベトナムを知る＝マクロ、ミクロの視点から

ベトナムは人口9000万人（東南アジアで第3位、世界で第13位）。2030年に1億人を突破する見込みで、毎年約150万人が労働市場に参入しています。平均年齢が28歳と「若い国」で、きれいな人口ピラミッドを描きます（人口構成は15歳未満が25%、15～64歳は68%、65歳以上は7%。ちなみに日本の平均年齢は45歳）。社会主義であるため教育費が安く、就学率、教育水準がともに高く勤勉（識字率90.4%）。ある程度インフラが整っている東南アジアの中位グループの中では、中小企業でも進出しやすい国となっています。日系企業はここ数年で1500社が進出。在住日本人も現在は2万人と、このところ倍加する勢いで増えています。

ベトナムの特長はまず安価で豊富な労働力、そして器用で勤勉な国民性です。またマーケットとしての今後の成長性も期待されます。安定した政情や治安の良さ、親日的な国民性、日越の良好な関係、地政学的な優位性も挙げられます。一方、デメリットとしてはインフラ整備の遅れ、現地における部品調達の困難さ、賃金の上昇傾向と物価高などが指摘されています。

□ 中国料理か？ベトナム料理か？

例会後半はグループ討論。テーマは「ベトナム料理と中華料理、どちらが飽きが来ないか」でした。「料理」は当然比喩としてのもので、実際にベトナム料理を食した人は少数派でした。

各テーブルからはさまざまな意見が出ました。「中国にはある程度知識があるがベトナムとなると知らないことが多い」「『若い国』と言えば聞こえは良いが、ワイロの習慣が横行し、法整備もいま一つ」「インフラ整備もこれから」「ベトナムは極めて親日的、この点で中国と大きく違う」「中国人やベトナム人の仕事は雑と言われるが、逆から見ると日本が窮屈な社会なのかもしれない」「中国と比べてベトナムとは交流が浅い。交流を深めていけば良い点、悪い点が見えてくるはず」。

ベトナム進出に関心ある方は、樋崎さんからぜひ強力なサポートを得てください！

文：K総合会計　所長代理・大塚教進